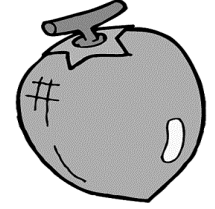


# 柿栽培技術情報（6月の管理）



令和4年5月31日

宮城県大河原農業改良普及センター

## 《6月の管理のポイント》

6月は、炭そ病と落葉病の重要防除時期です。

### 1 6月の管理

#### （1）受粉

かきは虫媒花であり、訪花昆虫はミツバチが最も多いです。したがって、ミツバチの放飼の効果は高く、結実率が向上します。また、開花期間中には訪花昆虫に影響の少ない農薬を使用します。

#### （2）早期落果

- ・かきは開花後の6月に生理落果が多くなります。
- ・落果の要因は、受精不良と栄養条件の偏りが主です。
- ・長雨の年は落果が多くなるので、生理落果が終わるまで摘果は控えます。

#### （3）芽かき

- ・骨格となる枝の直上に発生した徒長枝や枝が伸びる方向に逆行する徒長枝は、早めに除去します。
- ・大きな切り口に発生した徒長枝は、切り口に近いものを数本残して整理し、切り口のゆ合を促進します。
- ・弱い徒長枝は、次の年の側枝に育成することもできます。
- ・凍霜害で大きな被害を受けた樹では、主芽だけでなく副芽も枯死しています。休眠芽や不定芽が遅れて発芽し、新梢の本数がある程度確保できる場合がありますので、今後の経過に気を付けましょう。
- ・凍霜害の被害が軽い場合は、残った芽や副芽が発芽して新梢が混み合う場合がありますので、枝の上下から発生した新梢を中心に芽かきを行います。なお、残した新梢は、次の年の結果母枝に育成できます。
- ・凍霜害を受けた樹は病害虫の被害を受けやすくなりますので、次の年の収穫に向けて防除は確実に実施しましょう。

### 2 病害虫防除

#### （1）炭そ病

炭そ病は管内での発生量が多く、重要な病害です。

新梢の発病を徹底して防ぐことが重要です。樹形が乱れても病斑枝の切除を徹底します。

##### イ 発生生態

- ・病原菌は枝の病斑の中で、菌糸の状態越冬しています。
- ・3月下旬頃からの降雨で病斑の表面がぬれると胞子をつくり、第一次伝染源となります。
- ・胞子は雨水で伝搬され、新しい組織に侵入します。7～10日の潜伏期間を経て、降雨があると新しい病斑上に胞子をつくり、第二次伝染源となって被害が拡大します。

- ・5月～6月にかけて降雨が多いときは、新梢や幼果の発病が多くなります。
- ・8月に高温・乾燥期間が続くと一時沈静化しますが、気温が下がる8月下旬以降に降雨が続くと、果実の発病が激しくなります。

#### ロ 防除のポイント

- ・耕種的対策  
被害枝や被害果は切除して、園地外へ処分します。
- ・薬剤防除  
重点防除時期は6月中旬～7月中旬、8月下旬～9月下旬です。炭そ病菌は雨水で感染拡大しますので、週間天気予報を注視し、降雨前に薬剤防除を実施しますが、散布後1～2日程度は降雨のない日に防除すると効果が高くなります。



炭そ病の徒長枝病斑

### (2) 円星落葉病

円星落葉病は管内での発生量が多く、重要な病害です。

#### イ 発生生態

- ・病原菌は、落葉の病斑内部で越冬しています。
- ・4月以降になると子のう殻をつくり、その中にできた子のう胞子は、風雨により飛散します。
- ・感染時期は5月中旬～7月上旬です。
- ・感染後2～4か月の潜伏期間を経て、9月上旬頃から発病をはじめ、9月中旬～下旬にかけて急激に発病します。
- ・生育期の病斑上では胞子ができないので、二次感染はありません。

#### ロ 防除のポイント

- ・被害落葉は集めて土中に埋めるなど、適切に処分します。
- ・重点防除時期は5月～7月です。特に6月の防除を徹底します。



円星落葉病の秋の病斑

### (3) 角斑落葉病

#### イ 発生生態

- ・病原菌は落葉中の菌糸で越冬しています。
- ・5月下旬～6月上旬頃、落葉上に分生胞子をつくり、風雨により飛散します。
- ・一次感染の主要な時期は、6月中旬～7月中旬です。
- ・感染後1か月の潜伏期間を経て、7月頃から発病をはじめ、落葉時期にかけて発病します。
- ・葉の病斑上に分生胞子がつくられ、二次感染を引き起こします。

#### ロ 防除のポイント

円星落葉病と同じです。

### (4) カキクダアザミウマ

カキクダアザミウマは若葉や果実を加害する害虫です。

#### イ 生態

- ・年1回の発生です。
- ・成虫態で樹皮のすきまにもぐり、集団で越冬しています。
- ・4月に越冬成虫が飛来し、若葉を縦に巻き、その中で産卵し、5月には第1世代幼虫が発生します。

- ・ 第1世代成虫は6月に幼果を加害し、果実に黄褐色の小斑点が輪状にあらわれます。
- ・ 7月下旬までには、かき、まつ、すぎなどの樹皮下に移動します。

□ 防除のポイント

- ・ 巻葉は見つけ次第除去します。
- ・ 薬剤防除は5～6月に実施します。

(5) カキノヘタムシガ

イ 生態

- ・ 年2回の発生です。
- ・ 幼虫態で粗皮下にまゆをつくって越冬しています。
- ・ 越冬世代成虫は6月に出現し、芽、枝、葉、果実などいたるところに産卵します。
- ・ 第1世代幼虫は芽や果実を加害し、8月に成虫が出現します。
- ・ 被害果は黄褐色となり、へたを残して落下します。樹上に残ったへたに小さな穴と虫糞が見られます。

□ 防除のポイント

- ・ 薬剤防除は成虫発生期の6月と8月に実施します。

参考 6月のかきの病害虫防除事例

令和4年5月31日現在

散布時期	対象病害虫	薬剤名	作用機構分類	希釈倍率／散布液量	使用時期	本剤の使用回数
開花直前 5月下～ 6月上旬	炭そ病 落葉病	ジマンダイセン水和剤	FRAC: M03	400～800 倍／200～ 700 <sup>リットル</sup> /10a	収穫45日 前まで	2回以内
落花直後 6月中旬	炭そ病 落葉病	スコア顆粒水和剤	FRAC: 3	3,000倍／ 200～700 <sup>リットル</sup> /10a	収穫前日 まで	3回以内
	アザミウマ類 カキノヘタムシガ	モスピラン顆粒水溶剤	IRAC: 4A	2,000～ 4,000倍／ 200～700 <sup>リットル</sup> /10a	収穫前日 まで	3回以内

※ 農薬使用上の注意

- ・ 使用回数はその農薬の使用回数を示していますので、農薬を使用する際には、その剤の使用回数と含有する成分ごとの使用回数に注意してください。
- ・ 農薬散布を行う場合は、事前に最新情報で農薬登録を確認の上、使用してください。また、農薬使用の際には飛散防止対策を講じてください。